

吉村昭著「高熱隧道」新潮文庫、新潮社 1975年7月25日刊を読む

高熱隧道

1. 十年ほど前、黒部第四発電所建設工事のおこなわれていた黒部^{けいこく}溪谷を訪れたことがある。宇奈月から^{けやくだいら}樺平まで黒部鉄道の軌道車に乗り、樺平からさらに隧道内に設けられた大きなエレベーターに乗り込んだ。今思い返してみると、そのエレベーターでのぼった200メートルほどの^{くつさく}豎坑は、黒部第三発電所建設工事第三工区の掘鑿した豎坑であった。
2. エレベーターの終点の隧道内には、密閉できるようになっている木製の箱車が待っていた。やがて軌道車が動きだしたが、しばらく進むと妙な熱さが私の体を包みこみ、かたく閉ざされた^{とびら}扉のすき間からも湯気が入りはじめた。箱にとりつけられた小さなガラス窓から外をみると、隧道内には濃い湯気が充満している。急速にたかまってくる熱気とそして湯気の密度に、私は、なにかこの隧道内に異常事態が起こっているのではないかと思った。が、同乗している労務者たちは、顔を伏せてじっと堪えているような姿勢をとりつづけている。私は、^{ようや}漸く熱気と湯気が、その隧道にとっては正常なものであるらしいことに気がついた。しかし、その異常な熱さは私の^{こころ}落ち着きを失わせた。そして、息苦しさの限界がきたと思った頃、坑道内に^{こころ}明るみがさして、熱気も湯気もうすらいだ。軌道の終点、仙人谷に軌道車がすべり出たのだ。
3. 私は、その時初めて高熱隧道の存在と、その工事が^{まれ}隧道工事史上きわめて稀な難工事であることを知った。
4. 私は、その折、黒部溪谷に20日近くとどまったが、貫通を急いでいた大町トンネルの工事現場の光景には大きな衝撃をおぼえた。巨大なドリルジャンボアの^{けんこう}穿孔、大きな岩石をすくい上げるロッカーショベルの動き。それらの中にまじって岩盤ととりくむ技術者や労務者は、あきらかに私とは異質の世界にすむ人間の姿であった。どうしてそのようになるのかわからないが、私は、何度もただ一人^{きりは すみ}切端の隅や側壁に押しつけられてしまった。その折りの身動きできなくなった自分に、私は、はかない人間としての自分の存在を見せつけられたような^{いしゆく}萎縮した卑屈感と孤立感を味わった。
5. 私は、その後何度かその折の印象を文字にしたいと願い、その都度失敗したが、やがて私の胸中に高熱の充満する隧道と大町トンネルの切端で得た印象とが結びついた。私にとっては、10年目にして漸く筆にすることのできた素材であった。
6. 作品化に当っては、隧道そのものが実在するかぎり工事過程には出来るかぎり正確さを期した。完全な資料が残されていないので多少の過ちはあるかも知れないが、私なりの努力は果たしたつもり

でいる。ただ登場する人物は、私の創作によるものである。私の主題を生かすために高熱の充満する隧道工事をかりて、それと接触した人間を描きたかったからである。

P228 ~ 229 のあとがきより

[コメント]

労働とは何か、企業の社会的使命とは何かを深く考えさせる吉村氏の作品、ノンフィクション作品として見事というしかない。

- 2009年9月12日 林明夫記 -